

Tsumama project

平成25年度 特別経費

芸術文化を起点とした実践的教育モデルの構築

つままプロジェクト

富山大学芸術文化学部教授 大氏 正嗣



つままプロジェクトの概要と平成25年度の位置づけ

高岡キャンパス中庭にある「タブノキ」の古名である「つまま」を由来とする「芸術文化を起点とした実践的教育モデルの構築」プロジェクトは、平成23年4月に開設した大学院（芸術文化学研究科）の実践的教育と地域社会の活性化を一体化した授業形態推進を目標とし、地域連携事業を活用して就業力を身につけた高度な専門職業人である「新時代を担うアーティスト」「クリエイティブ産業のコーディネーター」「新たな地域文化のリーダー」を養成しようとする試みです。

このプロジェクトは平成23年度よりスタートし、具体的な活動として以下に示す8つのプロジェクトで構成されています。

1. 地域連携プロジェクト（地域連携活動の統括）
2. ギャラリープロジェクト（芸文ギャラリーの運営他）
3. 開発プロジェクト（県デザイン経営塾他）
4. 文化財修復プロジェクト（曳山修復他）
5. 地域活性化プロジェクト（金屋町楽市、クラフト市場街他）
6. まちづくりプロジェクト（まちづくり事業の統括）
7. 創造的教育環境整備プロジェクト（学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト他）
8. 情報発信プロジェクト（連携キャラバンの実施、提携校との交流他）

平成25年度は4ヶ年プロジェクトの3年目に当たり、1年目の体制整備、種々の事業計画スタート、2年目のモデル事業の立案の流れを受け、またプロジェクトのスタートと時を同じく入学した研究科生の修了もあり、モデル事業を明確な形として捉え着実に実施していく年度と位置づけられます。

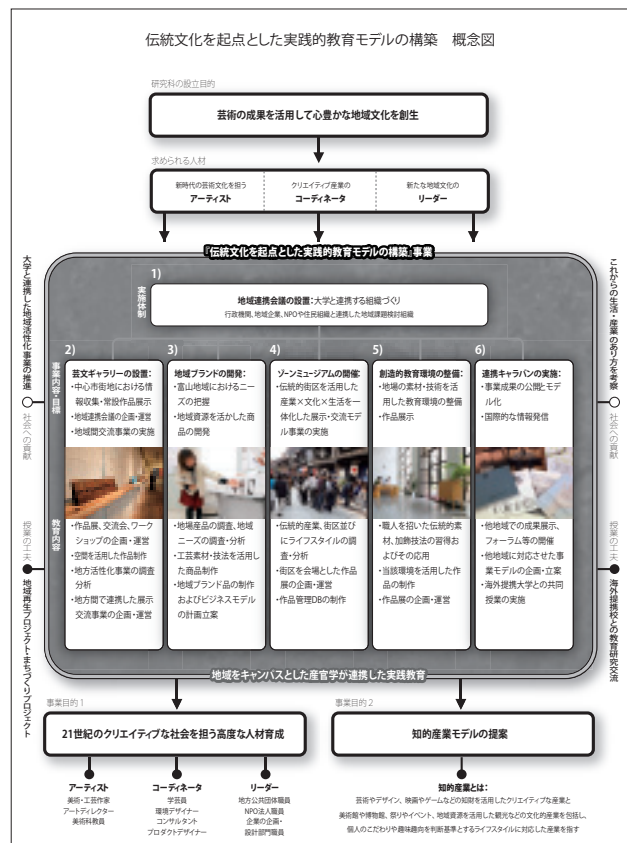
プロジェクト3年目の成果としては、外部講師招聘による授業の充実、地域活性化プロジェクトである金屋町楽市や高岡クラフト市場街に対する研究科生及び学部生の関わりの増加と充実、芸文ギャラリーが企画する展示会の地域貢献としての広がりなど、プロジェクトが着実

に地域に浸透していく状況が目に見えるようになりました。

学生たちも社会に飛び出し実践的な経験を積むことで、机上の理論だけではとどまらない経験を積み続けています。

最終年度に向けて

当初関わってきた研究科生も修了して社会人となり、新たな研究科生を迎え入れることで世代交代が進んできました。プロジェクトに関わってきた修了生が社会にどのような形で定着していくかを見極め、途中から関わる研究科生が現状をどのように受け止めているかを注意深く追跡していくことが必要となります。



以下、平成25年度に実施した具体的事例を写真を交えて紹介します。



写真1：「おいしい富山のつくりかた」展示（4月）
東京の新丸ビル7階「丸の内 HOUSE」で、図工女子のメンバーが会場の装飾を手がけました。『富山』という題材を基に各作家が制作した作品を図工女子の装飾と言うフィルターを通して感じられる企画でした。



写真4：「造形表現特論」現代作家のアトリエ訪問（7月）
油彩画家と立体造形作家2名のアトリエを訪問し、実際に最前線で活動する専門家の声を直接聞く機会を持ちました。



写真2：「デザイン学特論」松本クラフトフェア視察ツアー（5月）
昨年に引き続き、松本市で開催される松本クラフトフェア視察ツアーを実施しました。また、街並みや街中で開催されている関連イベントについても詳しく調査を行いました。学生アンケートでも参加者全てが「良かった」と評価しており、作家さんとの交流が刺激となったようです。



写真5：「プロダクトデザイン実習D」（8月）
人間工学測定法で学んだデザインプロセスの知識をベースに、木質ペレット燃料を利用した新しいポータブル燃料器具のデザイン制作を行いました。学生たちが制作した作品は、芸文ギャラリーにて展示されました。



写真3：「パフォーミングアート」特別演習（7月）
昨年に引き続きパフォーミングアーティストの宇都宮千佳さんによるコンテンポラリーダンス作品の実技演習を行いました。世界で活躍するアーティストが地域や国際社会に如何に貢献できるかを学びました。



写真6：金屋町楽市 in さまのこ（9月）
江戸時代初期以来の街並みと銅器工芸の職が混在する高岡市金屋町全域を使って行う生活空間内展示です。その展示に多くの学生たちが関わり、工芸×生活×産業のゾーンミュージアムにおいて実践的な住民との関係を学びました。



写真7：高岡クラフト市場街・クリエイティブ展（10月）
高岡市中心部を舞台とし、約25か所の会場で多発的なイベントを実施する高岡クラフト市場街において、芸術学部学生のアイディアを地元の工芸職人が実現するという大学と社会のコラボレーションを実施しているクリエイティブ展が、イベント内で個別の展示を行いました。また、同時開催される高岡クラフトコンペにおいて、クリエイティブ展の作品が奨励賞を受賞しました。



写真10：「博物館実習Ⅰ」ー芸文の秘密基地ー（11月）
学芸員取得を目指す学生が実際の博物館展示を演習するために、芸術文化学部が所蔵する作品を用いて工夫を凝らした展覧会を芸文ギャラリーを利用して企画から取り組み実施しました。



写真8：院生展ギャラリートーク（11月）
芸術文化科学研究科修士課程2年生の平面と立体に関する展覧会を芸文ギャラリーにて開催しました。出品者が自ら説明するギャラリートークにおいて、富山県立近代美術館より学芸員をお招きして作品の講評を頂きました。



写真11：ボランティアの世界（11月）
地元NPOの協力を得て、ボランティア活動の概要と状況を学びました。また、視覚障害者の誘導体験や音声パソコンの利用、遠隔支援の実際など体験を交えた貴重な経験を得ました。



写真9：大学院修了研究・制作中間発表会（11月）
芸術文化科学研究科修士課程2年生7名による修了研究・制作の中間発表会を実施しました。研究科生は1人15分の持ち時間で研究内容の発表と質疑応答を行いました。



写真12：「建築特論演習B」建築家による学生コンペ審査講評会（11月）
高岡市内にある伝統建築群保全地区である山町筋の空き地を利用して、伝統を継承しながらも新しい住まいの提案を学生たちが行いました。その内容を専門家である建築家を交えて議論し、講評をいただきました。



写真 13:「文化資源特論演習」外部講師を迎えての授業 (11月)
陶磁器の産地として名高い多治見市より、自治体で文化政策に取り込んでいる専門家をお招きして、自治体に取り組むべき施策や直面する現状などについて興味深いお話を聞くことができました。



写真 16: ラハティ応用科学大学×芸文連携授業 (1月)
大学間交流提携を結んでいるフィンランドのラハティ応用科学大学から講師をお招きし、学生と教員に対する特別講義を開催しました。異なる社会から見た芸術・文化についての新たな刺激を受けました。



写真 14:「製品評価法」高岡 HUB 計画 (1月)
高岡の“駅づくり”プロジェクトとして駅前の活性化を学生たちが考えた方法により実践的に図ろうという取り組みです。今回の計画では、駅の近くに少しでも人を引き寄せようと「たかおかトートバッグ」の販売実験と、バスや万葉線の待ち時間に利用できるカフェの提案を行っています。



写真 17: デザイン経営塾 (1月～3月)
富山県と芸術文化学部が協働する、地域の事業所や団体へマネジメントに関して学ぶ取組みで、学生たちが参加したセミナーも行いました。



写真 15:「富山-秋田」マチツクリフォーラム (1月)
2013年4月から4年制へ変更となった「秋田公立美術大学」との連携情報交換フォーラムを開催しました。長いディスカッションにおいてそれぞれが直面する問題についての理解と、今後の活動継続から新たな道筋を見出しました。



写真 18: かまぼこ大学 (3月)
2回目となる「かまぼこ大学」を芸文ギャラリーにて開催しました。地元名産品である「かまぼこ」を用いた新しいチャレンジの企画となっています。今回のテーマは「もう一度愛されるかまぼこ作り」として学生たちがニーズを提案し、新作かまぼこが披露されました。